太宰治・コミュニズム・山岸外史

綱澤 満昭

太宰治のコミュニズムへの接近の一つの要因は、彼の出自である「津軽の殿様」と呼ばれた大地主の息子であることからくる贖罪の念、「被告的」意識にある。

「私の家系には、ひとりの思想家もゐない。ひとりの学者もゐない。ひとりの芸術家もゐない。役人、将軍さへゐない。実に凡俗の、ただ田舎の大地主といふだけのものだ。」（「苦悩の年鑑」『太宰治全集』8、筑摩書房、昭和四十二年、二〇五頁）

このような家に生れ、育った太宰には、わが世の春を謳歌している津島家の存在そのものが許せなかった。近隣貧民の生き血を吸って太っていっただけの大地主を、太宰は極力軽蔑していた。したがって、家内外で働く人たちの己に向ける冷たい憎悪の視線を、彼は肉体的に感受しながら育ったのである。不労所得のうえに築かれた家そのもののなかから湧出する放蕩の血が己の身体を流れていることに、太宰はやりきれぬおもいを抱いていた。この津島家の血に太宰は絶対的悪の烙印を押した。そのうえ、彼は津島家の六男という存在がもたらす家族制度の理不尽な圧力のなかで、常に冷酷な処遇にさらされていた。己の存在そのものが、真に父母の子であるかどうかさえ疑った。

この家庭内における幼少年期の憎悪と不安の魂は、その後の太宰の人生に大きな影をおとすことになる。

ふがいないことに、この富豪津島家の庇護をも太宰は甘受するのである。一般の生徒、学生とは段違いの生活を享受している。コミュニズム的運動への傾倒もあって、長兄からは小山初代との結婚を条件に「分家除籍」という結末をむかえることとなる。

ついに太宰は、津島家追放になる。ということは村落共同体からも追放ということになるのであるが、当時、その追放ということが、いかなる意味を持っていたかは想像にかたくない。流浪の旅、漂泊の人生が待っているばかりであった。怒りの昂揚の場として、また、悲哀と屈辱の解消の場として、太宰はコミュニズムにかかわろうとした。昭和初頭のコミュニズムの抬頭への知的青年の反応ということも大いにありうることではあるが、彼には、それを受け入れてみようとする十分な条件があったということである。

津島家の貧民に対する搾取、抑圧に対する徹底した批判、攻撃、家長を中心とした家制度の矛盾剔抉が、太宰をして、倫理、道徳的に絶対的なものとしてのコミュニズムへの道を走らせた。太宰にとって、コミュニズムは倫理・道徳の体現化されたものとして映っていた。しかもこの非合法活動というものが、明日を持たない太宰にとって、かすかではあるが、癒しの場であり、楽しみの場でもあったのだ。

この倫理・道徳の問題とコミュニズムへの関係を云々することを、日本にはどうも希薄化する風土がある。大地主の息子はコミュニズムによって打倒される存在でしかなく、コミュニズムにとっては、好ましからざる存在であるとの前提がある。

弱者、貧者への惻隠の情、憐憫の情というものは、なにもコミュニズムを遠ざけるものではなかろう。貧や弱でなければコミュニストの資格がないなどと強説することは、一つ間違えば暴論になりかねない。コミュニズムへの入口は多様である。

太宰とコミュニズムの関係については、すでに多くの論者が関心を抱き、幾多の議論が展開されてきた。私がここでそれを超えるだけのものを提供出来ると思っているわけではないが、従来、この問題にアプローチした人たちの賢察の整理くらいは出来るだろう。

コミュニズムへの関与とそれからの脱落、逃亡ということが、太宰の人生、文学に極めて大きな影響を与えたとの主張からみていこう。まず、奥野健男である。奥野は、作品のなかにコミュニズムそのものの直接的な発言がみられないことを理由に、太宰文学とコミュニズムの関係はない、あっても表面的なものだと断定してはならず、そのような評価はむしろ間違いだと次のように主張する。

「彼が直接作品の中で語らないにしろ、いや語らなければ語らないほど、それだけ心の奥底に、深くコミュニズムの影響が秘められているのを感じるのです。…（略）…ぼくは彼の作品を読めば読むほど、太宰文学の本質に喰い入ったコミュニズムの影響の深さを知るのです。ぼくには太宰の文学も生涯もすべて、コミュニズムからの陥没意識、コミュニズムに対する罪の意識によって、律せられていると思えるのです。」（「コミュニズムの時代―「晩年」以前―『太宰治論』新潮社、昭和五十九年、六二頁）

誇るべき系図もない（太宰自身の言葉）くせに、貧しい人たちの生き血を吸って太った大地主階級である津島家に対し、太宰は言い知れぬ憤りを感じ、ほぼ本能的な負い目さえ抱いていた。これは太宰より十年余り早く生れている童話作家、詩人である宮沢賢治の家長に対するおもいにちか

い。厳しい自然環境と土地制度の矛盾のなかで呻吟する貧農から、次々と無慈悲にも収奪を繰り返していた家長に対し、賢治は己を「社会的被告」と称し、父親が他界すれば農民たちに宮沢家の土地をくれてやると断言するまでにいたっていた。東北農村、そこに生きる零細農民の生活実態を知っていた賢治は、彼らに対し同情の涙を流し、農民運動などの領域にも接近していた。労農党稗貫支部における彼の支援ぶりを次のようにいう人もいる。

「一九二七年には、賢治の町花巻にも、労農党稗貫支部が結成された。賢治はしばしばその支部メンバーと接し、彼らへの支援を惜しまなかったが、昭和三年二月の第一回普通選挙を闘う労農党稗貫支部に対しては絶大なる支援を行っている。それは、謄写版一式を贈り、親類筋の長屋を党の支部事務所として借りてやり、その家賃の五ヵ月分にあたる金二十五円也をカンパしているのである。」（「元・労農党支部書記長　煤孫利吉談」、吉見正信『宮沢賢治の道程』八重岳書房、昭和五十七年、二四九頁）

この点に関しての賢治と太宰との比較は別の機会に論じるとして、話を元に戻そう。

太宰とコミュニズムとの関係を強烈に意識し、コミュニズムへの憧憬、畏敬のなかに生きた太宰ということは多くの人が認められているが、奥野はことのほか、この点を強調し、昭和五年の鎌倉七里ケ浜での田部シメ子とのカルモチン心中の理由もそこにあったと次のようにのべている。

「高等学校に入って怒濤の勢いで拡がるコミュニズムの思想を知った時の衝撃は、想像に絶するものがあったに違いありません。学友たちの多くのものがコミュニズムを信じ、実践し、そのために弾圧され、放校され投獄されて行くのを、恐怖と畏敬とそして羨望とをもって見守りました。だが自分の出身階級を考えると、特にその名門の出であることをひそかに誇りにも思っていた自分を顧みたとき、彼はコミュニズムに加わる資格のない自分に絶望を感じたのです。彼は高等学校に入った直後、この理由だけで、カルモチン自殺を図りました。」（奥野、前掲書、六四頁）

奥野にいわせれば、太宰はコミュニズムを利他主義、自己犠牲的精神の体現されたものとしての完全無欠の倫理として理解してはいたが、実践ということになると出自が大地主の息子であるがゆえに、そこに矛盾、撞着を感じずにはおれなかったということになる。政治と倫理を切り離すという作業が太宰には出来なかったと奥野はこういう。

「コミュニズムを倫理的思想として受けとった彼はその科学性、政治性を、概念的には正当と認めながら、実際行動において、倫理性を除外した政治を、ドライに行うこと

ができなかったのです。」（同上書、七三頁）

太宰は実に己の人生の倫理的目標として、コミュニズムを選択した。倫理上の目標としてのコミュニズムは、権謀術数的、マキャベリズム的行動に直接するものではない。

太宰の親友の一人であった亀井勝一郎も奥野と同じ線でこの問題を考えている。

この時代を生きた知的青年たちの多くが、コミュニズムの洗礼を受けるにいたったのは、次のような背景があったからだと亀井はいう。

一つは、「マルクス・レーニン論のもつ決定的威力である。…（略）…マルクスの理論を知れば、これによって解決されないものは一つもなく、これによって論破されない対象は一つもない。そういう威圧力として青年に作用した。」（「太宰治の人と作品」、亀井勝一郎編『太宰治』〈近代文学鑑賞講座第十九巻〉角川書店、昭和三十四年、一一頁）というもの。

二つ目は、「資本家とその政党の腐敗、一般国民の生活上の不安が存在したことである。」（同上）

いま一つは、「明治以来の倫理的空白である。…（略）…青年は自己の支柱として、何らかの意味での倫理を求めていた。…（略）…いわば共産主義に心ひかれる青年の心理的動機として、新しい倫理への渇望のあったこと」（同上）

太宰は、倫理としてコミュニズムを受け入れ、それへの絶対的崇拝を人間の努めであるかのように思う。悪徳地主は許せない。打ちのめすべきだ。しかし社会的運動として実践するだけの力量も度胸も太宰にはない。そうであればあるほど、観念としての撃滅の武器、コミュニズムによって、太宰の精神は昂揚する。太宰文学全体について亀井はこう説明する。

「全作品を一筋の道のようにつらぬいているのは、『逃亡者』の苦悩であり、『裏切りの苛責』である。それが女性との関係において描かれているとはいえ、背景として、私はやはり左翼との連関を考えないわけにはゆかない。」（同上書、一〇頁）

こういった類の評価と違って、太宰は新しい流行のコミュニズムに対して、その感受性の強さゆえ、反応はしているが、実質的にはそれに深くかかわることもなく、従ってその運動からの逃避や裏切りという行為が、彼の文学に基底のところで大きな影響を与えているものではないとする評者も多くいる。

太宰のコミュニズムへの接近は、青春時代に誰もが遭遇する淡い夢であり、大地主の息子という存在が、体質的にそういう主義、運動が出来るはずはないと一蹴する方法である。

弘前高等学校時代の旧友の一人に大高勝次郎がいるが、彼はそういった太宰評価の一人である。

『細胞文芸』に掲載した「無間奈落」、「股をくゞる」、『弘前高校新聞』の「鈴打」、「哀蚊」、『弘前高校校友会誌』の「此の夫婦」などを太宰は大高らに朗読して聞かせたという。

大高は太宰のマルクス主義についての不勉強を指摘し、知的青年の一人として流行を追ったという感が強いし、また、太宰はコミュニズムについて極端な恐怖の念さえ持っていたというのだ。

「彼の鋭敏な知性は左翼の思想に深い関心を抱かざるを得なかったが、私の知る限りでは、彼は弘高在学中は左翼の思想にも組織にも無関係であった。否、彼はそれらのものに対して、心中必死の抵抗をしていたのである。…（略）…大地主の家に生れ、貴族を自負する彼は左翼思想に対しては普通の人の何倍も恐怖を感じていたのである。」（「津島修治の思い出」、桂英澄編『太宰治研究Ⅱ―その回想』筑摩書房、昭和五十三年、二六頁）

「彼には左翼運動を闘わねばならぬ階級的地盤も、知性の強さも、政治的野心も無かった。」（同上書、四五頁）

大高の評価には、同級生で太宰よりも成績も勝れていたというようなこともあってか、なにか強烈な対抗意識のようなものが前面に出ているようにも私には思える。太宰は大地主の息子であることを鼻にかけ、貧しい人を馬鹿にし、じつに傲慢な人間だったと大高はいう。マルクスの文献などとは、およそ無縁で、弘前高等学校の教授に一喝された話などをわざわざ持ち出している。昭和四年に発覚した校長の公費不正使用に関するストライキの件への太宰の関与に関しても、次のようにみている。

「津島のストライキに対する態度は甚だ消極的であった。…（略）…寧ろ校長に同情していたようであった。一面又、彼の生家と、鈴木校長との間に、政友会というつながりがあったことが、彼の行動を束縛したようにも思われる。…（略）…とにかく多数の生徒が、鈴木校長のふしだらをまともに憎んだのに反し、津島は『学生群』に於ても鈴木校長に深い同情を示している。」（同上書、三三～三四頁）

こういう大高であるが、東京帝国大学時代にアジトの件、金銭面での援助に対しては、太宰に深々と頭をさげている。

同じ方向であるが、本多秋五の評価は実に面白い。根本的に太宰なる人物は、コミュニズムなんかとは体質的に合わない存在だという。最低限度の教養としてコミュニズム思想を身につけてはいたが、どだい生きるための思想などとは無縁のところで太宰は生きた。死への傾斜を強烈に希求した人間で、この世の常識からは遠く離れた地点に生存の根拠を置いていた。人類社会の明るい未来など不要で、

今日か明日くらいのところで消えうせる人間を志向したという。本多の言はこうだ。

「太宰は、意志なく、計画性なく、克己心もなく、人が生きるのに必要な能力を欠き、生きるのに必要でない能力ばかりが秀いでた人間であった。共産主義は、他になにはなくとも、生きる能力だけはあり、生きたい欲望のとくに旺盛な人間の思想であった。太宰はいつも死にたい傾向の人であり、消えてなくなれたら本懐という人間であった。生きたい人間の思想は、共産主義のほかにまだいろいろある。そうでない思想がもともと例外なのである。太宰は、生きたい人間の思想一切から、いつかは分離するほかない人間であった。」（「太宰治と共産主義」、亀井勝一郎編、前掲書、二九六頁）

本多は、太宰のコミュニズムへの肉体化など認めない。太宰のような生きる思想と無縁の地点で生きていた者までもが、当時の流行思想に、多少なりとも影響されたというところに意味があるというのだ。

かなりの人が、あれこれと太宰とコミュニズムとの関連を強調してはいるが、「人間としての太宰は、共産党が非合法であった戦前の日本ではもちろん、いつの時代、どこの国においても、共産主義者の社会に不向きな男であり、好ましからぬ人物であった。」（同上書、二九三頁）と本多は断言する。

ここは本多のいう通りであったとしても、つまり共産主義側からみれば、たしかに太宰は「好ましからぬ人物」であったかもしれぬが、そのことが太宰が共産主義を崇持し、共鳴していたことを否定するものではなかろう。

いま一人、相馬正一の主張をあげておこう。彼は太宰とコミュニズムのかかわりに対して、極めて冷やかな眼を持っている。若干のかかわりがあったとしても、それは太宰にとっては第二義的なもので、内発的なものではないという。

いずれの時期においても、太宰が本格的にというか、心の底からコミュニズムを確信し、内発的にその道に入ったことはなく、ただ当時の流行思想に流され、その知的世界にたまたま太宰も居合わせたというにすぎない。昭和四年のカルモチン自殺未遂にしても、思想的なことがその原因ではないという。したがって、それほど深くかかわってもいないコミュニズムからの脱落とか、逃亡ということも、当然のことながら深く大きな悩みになることはなかろうというのである。太宰のコミュニズム接近がみられるとしても、それは虐げられたる者への同情、人道的救済への共鳴からのものであって、決して思想への確信からくるものではないと次のようにのべる。

「なるほど太宰は太宰なりに、精一杯文字通り命懸けで

時代思潮の中を泳ぎ回ったには違いないが、それは文学志向の誤算から生じた左傾であり、非合法活動に献身する『弱者』への共鳴であり、先輩や友人の青春を賭した生き方に対する暗黙の支持から生じた結果であっても、思想としてのコミュニズムそのものの信奉から生じたものではなかったのである。」（「太宰治とコミュニズム」、奥野健男編『太宰治研究』筑摩書房、昭和四三年、二〇六～二〇七頁）

太宰とコミュニズムの関係、そして、そのことが太宰の人生、文学に、どれほどの影響をおよぼしたかについて、多くの評者が賛否両論を説いてきたが、このテーマの論争の最大の欠陥は、太宰の実際の活動に関する確実に説得力のある資料の不在にあるとした斉藤利彦は、その穴を埋めるべく、「太宰治・非合法活動の実態」（『文学』第二巻第五号、岩波書店、平成十三年）を書いた。斉藤はこういう。

「私は、過日、東京大学百年史編纂過程で収集された文書その他を検討していく中で、これまでまったく未発掘であった資料も含め、太宰の帝国大学在学中の非合法活動を解明しうる資料を見出すことができた。これにより、その活動の実態を、ある程度系統的に論証することが可能となったように思う。」（同上誌、八七頁）

ここで斉藤の提供している資料すべてを紹介することは省略するが、これは太宰が東京帝国大学在学中に、津島修二の氏名で行動したであろうと思われるものを、「文部省との往復文書中の『学生部』に類別された文書群」（同上）と、「帝国大学総長宛に送付された各種資料」（同上）からぬき出したものである。

また、津島の名は使われていないが、これは太宰だと断定できる資料、さらに東京帝国大学学生課による彼の非合法活動とわかる間接的資料などである。これらの資料を検討した結果、従来明らかにされているものとは別に、二つのことが明確になったというのである。

その一つは、「青森一般労働組合が日本労働組合全国協議会（「全協」）に加盟しようとする一連の動きの中で、太宰が『全協』本部との連絡を担当するという活動である。」（同上誌、八九頁）

いま一つは次のようなものである。

「甥の津島逸朗を中心とした青森中学校内の非合法組織『社会科学研究会』の設立と実践行動に関与し、それを助言し支援する活動である。」（同上誌、九〇頁）

これらの資料を詳細に検討してゆけば、太宰とコミュニズムの関係は、相馬らがいうような二義的なもの、もののはずみなどといった類のものではなく、かなりの真剣さがそこにはうかがえるという。相馬を彼は次のように批判す

る。

「いずれにしても、『もののはずみや』『偶発的』『外在的な力の作用によって止むを得ず』太宰が非合法活動を行ってきたという相馬の評価は首肯できないものがある。」（同上誌、一〇〇頁）

このように斉藤は、太宰の真摯な態度でのコミュニズム体験を認めると同時に、注目したい点として『人間失格』から次のような個所を引用している。

「非合法。自分には、それが幽かに楽しかつたのです。むしろ、居心地がよかつたのです。世の中の合法といふもののはうが、かへつておそろしく、（それには、底知れず強いものが予感せられます）そのからくりが不可解で、とてもその窓の無い、底冷えのする部屋には坐つてをられず、外は非合法の海であつても、それに飛び込んで泳いで、やがて死に到るはうが、自分には、いつそ気楽のやうでした。」（同上誌、一〇一頁。『太宰治全集』第九巻、筑摩書房、昭和四十二年、三九六頁）

太宰にはこういう一面がある。この太宰のもちまえの心理、独特の感性などを十分考慮のなかに入れながら、この問題を取り組まねばならぬことをも斉藤は提言している。

太宰が最も多く書簡を送った相手は山岸外史であるが、その山岸はこの問題をどうみていたのか。山岸がどういう人物であったか、などについては、池内規行の『評伝・山岸外史』（万有企画、昭和六十年）などに譲るとして、ここでは太宰とコミュニズムについての山岸の眼だけをみておきたい。

『太宰治おぼえがき』の「まえがき」で山岸はこう書いている。

「新しい稿を百七十枚ばかり書き加えた。ぼくとしては、ここに、この一冊の特色を考えたいのである。『太宰と共産党』という最後の章がそれである。太宰の心の『どん底』にあって、終生、太宰を苦悩させていた党からの脱落。その良心と反省の意識。その経過の是非を理論づけること。その点をできるだけこの章で綿密に書いたつもりである。太宰はたしかにこの課題について、その生涯、傷手をもっていたから、その点を追求してみたのである。そしてこの角度から、太宰について、また『太宰文学』について考えることは重要なことだと思っている。それなしに、『太宰の悲劇』を考えることはできない。」（『太宰治おぼえがき』審美社、昭和三十八年、二頁）

この「まえがき」を覗くだけでも、山岸のこの点への追求の熱意が伝わってくるというものだ。

山岸と太宰の交流は、昭和九年の秋にはじまるが、やが

て二人の関係は山岸自身がいうように、「刎頸の友」となったようである。

昭和九年といえば、太宰はすでに青森警察に自首し、非合法運動から手を引いて、かなりの時間が経過していた。にもかかわらず、山岸は太宰の心中深くに、コミュニズムへの思いが刻みこまれ、それをずっと引きずっていたと読んでいる。二人は何故かくも親しくなったか。その親交の根源にあるものは何か。こういった問いを山岸はみずからに投げかけ、どうもそこには、同類の思想、つまりコミュニズムへの関心と志向があったと確信しているのである。マルクスを志向し、階級、社会変革といった言葉を二人は共有していた。左翼作家が話題になれば、太宰は異常な顔つきをしたという。

太宰の客観的存在は、大地主階級の御曹司ということである。この客観的存在に対し、一方ではある種の誇りを持ち、他方では六男に対する処遇という家庭内差別に苦悶する。誇りと憎悪が交錯するといった複雑な感情が、終始太宰の心中をかけめぐっていた。この複雑な感情を抱いて成育していった太宰を待っていたものの一つに、コミュニズムという風があったのである。

「高校時代には、何回か社会主義研究会などに顔を出すようなことにもなったようである。…（略）…大学時代に太宰は非合法運動に関係して、短時日ではあったが、党活動もやったのである。」（同上書、一六一から一六二頁）と山岸はいう。それどころか、真面目に、真剣に太宰は政治家、革命化の道を選ぼうとしたこともあるというのだ。しかし、当時の厳しい国家権力の弾圧と、仲間からの要請であったアジトの提供と、金銭の援助だけとあっては、それはあまりにもひどいじゃないかということになる。山岸にいわせれば、左翼によって利用されつづけた太宰は、ついにその夢を現実世界においては捨てざるをえなくなったのだ。それでも太宰には、「良心」というものが頑強に残っていたがゆえに、コミュニズムという現実世界からの脱落、逃避は、自己否定的、自虐的感情となって、太宰の腹中をいつまでもかけめぐったという。敗北は敗北、脱落は脱落であったとしても、一般的「転向」としてはすまされぬ「何か」があった。積極果敢とみえた闘士が、いとも簡単に「転向」していく状況下にあって、太宰の「良心」は、深く痛い傷として彼の心から消えることはなかった。転向作家を太宰は峻拒したという。山岸がある日、島木健作の作品に賛辞を与えたところ、彼は不快な顔をし、即座に否定したという。「転向したら終りだ」が太宰の持論となった。

昭和初期のコミュニズム、非合法運動の闘いが想像を絶する弾圧のなかで行われたことは周知の通りであるが、そ

れでもこの思想、運動が知識人たちにとっては、偉大にして、崇高にして、絶対的なものであり、それを支援し、そこに居るということが、異常なほどのエリート意識を満足させてくれるものであったことも事実である。

そうであったればこそ、山岸がいうように、「それからの脱落は、人間性そのもの、人間生活そのもの、知性そのものの否定にも通じたのである。太宰もそれは感覚で知っていたと思う。」(同上書、一六五頁)ということになるのである。

次に量的にも他を圧倒している山岸の「太宰治と共産党」に触れておきたい。太宰の初期作品、たとえば、「学生群」、「花火」、「地主一代」などへの強い興味と関心を示すところからこの論文ははじまる。これらの作品によって、山岸は、十数年も続いた親交を通じて、太宰のすべてを知っていたというこれまでの己の思いあがりを深く反省する。己は太宰の深層心意世界に測鉛を降ろしきっていなかった己を恥じた。

弘前高等学校時代をベースにした「学生群」に山岸は大きな関心を寄せる。折柄の流行もあって、コミュニズムへの傾斜、憧憬と、己の憐弱さの間に悩む「青井青年」は太宰そのものである。あれこれ頑張ってみても、所詮大地主の息子であるという現実から脱出することは出来ず、コミュニズムへの貢献といえば、唯一金銭的援助であるというところに帰結する。本来、打倒されるべき対象である「青井」が、大地主打倒を叫ぶことへの無理、限界、自己矛盾があるというものだ。どこまでいっても、シンパの域を出ない太宰の心情がよく表現されていると、山岸はみる。彼はここで、参考資料として、三・一五事件、特高警察の設置、東大新人会、京大社研の解散命令、河上肇の京大追放など、国家権力のコミュニズム大弾圧をもってくる。この嵐のなかでの知的青年の問題として、太宰の心情をとらえようとしている。

山岸は次いで弘前高等学校卒業後の太宰、東京帝国大学入学後の太宰の政治活動に注目する。さきにも触れたが、太宰は「転向」というものに異常な感情の昂揚をみせるというのだ。こんなことを山岸はいう。

「なによりも、太宰が『転向』に決定的な悪の規準をもっていて、その角度からぼくに喰ってかかったことが、ぼくにもよく判った。太宰は転向者というよりもむしろ、脱落者であったわけだが、しかし、転向にせよ脱落にせよ、党への裏切りということが、決定的なものだという厳格な倫理を太宰はもっていたのである。自分は脱落者であるにしても、その倫理性だけは失いたくないという最後の意志を太宰がもっていることを、ぼくはハッキリと知ったのである。」(同上書、二〇七頁)

精神世界において、コミュニズムという「倫理的絶対性」にしがみつくことによる陶酔と安堵が太宰にはあった。これは山岸自身の心情であったのかもしれない。

青森中学校、弘前高等学校の先輩で、東京帝国大学に入学し、コミュニズム活動をしていた工藤永蔵への太宰の優しさに山岸は注目している。（獄中の工藤に対し太宰は金銭的援助を確約している。）

同じく弘前高等学校を卒業し、東京帝国大学に入っていた大高勝次郎に触れ、後の太宰の苦悩に対しての理解の不十分さを指摘している。つまり大高は、太宰が地主階級という出自を持っていることがすべてで、そこからは、革命的政治的野望など生れるはずもなく、自殺の原因にコミュニズムからの脱落などを持ってくるのは無謀な論だとする大高の太宰評価に疑問を呈する。

昭和十一年に『晩年』を公にすることになるが、それ以後、太宰は彼なりのコミュニズム体験をいかなるかたちで継承することになるのか、はたまた、その問題のすべてを放擲し、無縁の地点に己を置いて生きるのか。山岸は戦後の作品を注視する。たとえば、昭和二十一年の作品である「苦悩の年鑑」をとりあげ、かつての「学生群」に登場した「青井青年」が再現されていることを指摘する。しかし、「苦悩の年鑑」より九ヵ月遅れて書かれた「トカトントン」では、戦後の「虚無的生理」という太宰の新しい姿勢をもみている。自由も民主も、いかなる政党も、それらはすべて、無条件降服ののちに湧いた蛆虫のようなものだとする太宰の虚無的生き方に山岸は注目する。

山岸はこういう。

「敗戦と同時にこの時期の国民は、天皇信仰も喪失したし、民族的高揚の精神も一挙に失った。戦時中、指導者にムザムザ欺かれていたことまで自覚して、国民というものの生活にガックリ落胆すると同時に、完全に精神虚脱してしまったのである。思考の支柱が突然なくなって、生理的な真実あるいは空虚がおこったのである。『論理』以上に『生理』がやられた。そんなひとりの青年をじつに明快に、かつ巧妙に太宰は表現している。」（同上書、二二七頁）

ところが、この一人の青年は、青森で直面したデモによって、思いを新たにする。躍動するデモ行進に衝撃を受け、涙を流す。政治不信、労働運動不信に陥いっていた己の精神を訂正したのである。日本の将来に一条の光明をみたのである。

昭和二十二年には、太宰文学の総決算ともいえる『斜陽』が出版されるが、ここでも貴族的出自を持つ「直治」は、「学生群」の「青井青年」の魂を継承しているというのだ。同じく昭和二十二年十月に『改造』に発表された「おさん」

を山岸はとりあげ、太宰の革命に対する感情の吐露に着目し、「夫」の心中の原因を恋情に求めず、革命からの逃避、脱落、そのことによる自己嫌悪的精神に求めたのである。しかし、太宰は「妻」に革命というものはもっと楽しく生きるためのもので、悲愴感ばかりが漂う革命家など信じられないといわせている。太宰はそのことを知り尽くしていたと山岸はいう。

ここで山岸の「太宰治と共産党」の結論ともいうべき言辞をいくつか引用しておこう。

(1)、「太宰には異例とまでみえるほどの反省心理が、幼児から旺盛にあった」(同上書、二五三頁)

(2)、「『大地主階級』の生活が根深く生理的な条件をつくっていたこと。」(同上)

(3)、「太宰のマルキシズムは、マルクス経済学的であって、マルクス・レーニズムという革命と政治への転化のあることに疎かったようにも見えるのである。」(同上)

(4)、「太宰の夢と尺度は『純粋で優雅で勇敢で誠実なコミュニスト』にあったように思われるのである。」(同上)

太宰の周辺には多くの知友がおり、それぞれの交流が行われていたが、なかでも、己が最高の理解者だと自負していた山岸は、コミュニズムと太宰の関係を、ことのほか重視していた。

山岸の視点が絶対的であるかどうかは別として、ここまで太宰のコミュニズムへの深いかかわりを指摘する彼の心中には、己自身のコミュニズムに対する独得の熱い思いがあったに違いない。山岸は昭和二十三年十二月二十五日に日本共産党に入党している。彼の入党の動機については、いろいろな憶測も成り立つであろうが、ただ山岸のこの党体験というものが太宰の心情理解の上で、このうえない役割を果たしていたことは間違いなかろう。山岸の次の文章を引いてこの稿をひとまず閉じておきたい。

「いつか時間がたってゆく間に、太宰の死への第一誘因が、やがてあの共産党からの脱落であったことが解ってきてみると、…(略)…ぼくは、たとえ、この時代の太宰の死への歩みが、いかにもたわいのないものだったとしても、その死への誘惑と逃亡について、まったく理解がもてないということではなかったのである。戦後十三年以上も党員生活をしたぼくが、かえって、そのあとになって、太宰のこのポイント(黒子(ほくろ)のようなこの一点)がいっそう深く解ってきたようなところがある。…(略)…党からの脱落者で、しかも良心を最後までもっていたものの方が、政治活動家そのものよりも、いっそう苦しむのではなかろうかということである。」(『人間太宰治』筑摩書房、昭和三十七年、七八～七九頁)